

軽井沢に遺されていた

ミス・ハミルトンとミス・ハードのコテージ

<はじめに>

細い坂道を上っていくと、広葉樹の林を、葉をゆらしてさわやかな風が吹き渡っていく。清涼な山の空気と土の匂いに包まれて、その古い木造のコテージはひっそりと建っていた。簡素な造りではあるが、明るい日差しの中でその家は訪れる人を招き入れるかのような雰囲気を見せている。二階まで突き抜けた外付けの煙突の石積みが目を引き、焦げ茶色の下見板張りに赤茶色の屋根、クリーム色の窓枠と入口ドアがアクセントになっている。

それが昨年2010年8月1日、ミス・ハミルトンとミス・ハードのコテージと、私達現代の東洋英和の者との70年の歳月を越えての出会いだった。

東洋英和に「ミス・ハミルトンの別荘が軽井沢で見つかった」という第一報がヴォーリズ建築事務所から入ったのは、その年の3月のことだった。私達はその存在すら知らなかったのが大変驚いたものだった。そのコテージ発見の顛末は、現所有者の方の熱意とヴォーリズへの思い入れに大きく困っていて、壊されずに保存され、私達の知るところとなったのは奇跡的な幸運だったとはまだ知る由もなかった。

<コテージの中>

中に入るとすぐの部屋 (Sun Porch) は広くて、三面に大きくガラス窓がとってあるのでとても明るく、おそらく来客との応接間として使われ



Living Roomの暖炉と戸棚



コテージ 外観

ていたのであろう。一面には今は所有者のY様によって、宣教師の先生方の写真が何枚も飾られている。

その奥は暖炉があって落ち着けるLiving Roomである。石を塗り固めた素朴な暖炉は、肌寒い日に住人にぬくもりをもたらしたのであろう。入口脇の腰掛けは中が物入れになっている。この部屋に旧校舎でも見かけたような大きな造り付けの食器棚がある。その先左手は台所とメイドさんの部屋につながっている。台所入口の床板は根太が抜けて足元が危ない。メイドさんの部屋は二段ベッドになっていて意外に広いが、ここは暗くて様子はよくわからない。右手はトイレと浴室になる。

二階は、居間からトントンと階段を上がると、まずSleeping Porchなる部屋に通じる。この部屋も日光と風がよく入る。お昼寝用の部屋だったのだろうか。大小三部屋ある寝室の二つには小さな手洗い場があり、引出しの多い衣装箆が備えられている。奥の寝室には小さなバルコニーも付いている。ここがミス・ハミルトンの居室だったのであろうか。一階の暖炉の上、暖気が通じるように煙突がつながっている寝室は少し広い。

その部屋の押し入れの奥にはもう一つ不思議な押し入れが設計図には見られる。誰も気づかな

いであろう謎のSecret Closet。ここに誰かが隠れることを、または何かを隠しておくことを想定して造ったのであろうか？いったい誰を？または何を……？

全体にほとんど飾りのない中で窓のカーテンレールの支えのデザインは懐かしいような曲線を描いており、このコテージはヴォーリズの手になるものと推察できる造りが随所に見られる。ミス・ハミルトン始め宣教師の先生方はここで山の涼しさと母国語三味の休養を満喫されたのであろう。聖書や本を片手に籐椅子に身を委ねて静かな瞑想の時を過ごし、朝夕は共に祈りの時を持たれたであろう様子が想像できるのであった。

<ミス・ハミルトンコテージの土地の歴史>

ーダニエル・ノルマンの時代ー

この別荘の建っている小高い近辺は、1910年に起こった軽井沢の大洪水のあと低地を避けて、カナダメソジスト教会宣教師のダニエル・ノルマン師がこの一帯を所有したのが別荘地としての始まりである。そのころはまだ木も生えない火山灰地であった。ダニエル・ノルマン師は「長野のノルマン」「軽井沢の村長さん」と呼ばれるほど、長野県北信地方の農村伝道に生涯をささげ、軽井沢避暑団の団長も二期務め人々に慕われた人物であった。

1920年頃ダニエル・ノルマン師の土地は分割され、①：ミス・ロバートソン、②：W.K.マシューズ、③：E.C.ヘニガーの所有となる。

ーミス・ロバートソンの時代ー

ミス・ロバートソンは東洋英和で教えた他、商議員でもあった方で、静岡英和・山梨英和で校長を務め、37年間の在日中、カナダミッションの日本での書記兼財務など要職を担われた。8代校長のミス・ヴィーゼーとの共有だった。E.C.ヘニガー氏もカナダ人で東洋英和の理事をなさったことがある日本禁酒同盟の英語秘書。彼も一時軽井沢避暑団団長を務めた。ヘニガー夫人（メイ）は夫とともに福井で栄冠幼稚園を開設、園長をされ、のち東洋英和では音楽を教えた。ピアノ科の発表会での写真が残っている。この方の旧姓はハートで、二人の姉妹（ネリーとシャーロット）も来日宣教師であり、東洋英和そして上田保姆傳習所で教えた方達である。



ハミルトン（左）とハード
1967年



境界石

ーミス・ハミルトンとミス・ハードの時代ー

ミス・ロバートソンの山荘（④）は1932年、ミス・ヘレン・ハードの所有となったことが登記簿から確認されている。今も残る境界石の一面にはHAMILTON / HURDと刻印がある。この二人の時改築を行うのだが、その際のヴォーリズ氏の設計図にはCOTTAGE FOR MISSES HAMILTON & HURD-KARUIZAWA (DATE JUNE 24 1932) とある。ミス・ハミルトンは東洋英和の15代および17代、カナダ婦人宣教師では最後の校長で、学校を近代的な女学校の体制に整えた英和の歴史上重要な人物である。彼女は創立50周年を期して校舎の建て替えを行った。その校舎の設計者がヴォーリズ氏であった。夏には軽井沢で事務所を構えるヴォーリズ氏に、麻布の地に校舎建築を依頼する際に、おそらく別荘の設計も依頼したのであろう。一方ミス・ハードはやはりカナダ人の宣教師で、東洋英和で教えたのは数年間だが上田や富山で英語を教え幼稚園の教師をして伝道に努め、滞日30年間にわたった方である。ミス・ハミルトンと2歳違いで二人はとても仲が良かったという。第二次大戦中はカナダのブリティッシュコロンビア州で二人ともレモンクリーク日本人収容所の、青少年のための学校で教壇に立って苦勞を共にしており、引退後は同じホームに暮らし、お墓でもご一緒に眠っておられる。

二人は戦争で帰国を余儀なくされたとき、このコテージを手放さざるを得なかった。

ーガントレット氏の子孫の時代ー

次の所有者土井利章氏は舅にあたるG.E.L.ガントレット氏の勧めで購入したという。越前大野城主・土井家の13代目で、夫人はガントレッ



ロバートソン



ヴィーゼー



ヘニガー夫人



ガントレット夫妻

提供：大空社、協力：女子学院

ト氏のお嬢さんのウインフレッド和子さんである。ウインフレッド和子さんの結婚の際は、当時は外国人は大名家の血筋と結婚できなかったため、一時新渡戸稲造氏の養女になる手続きを経たという。ところでガントレット氏はウェールズ出身の、貴族の家系のイギリス人で（男子の）東洋英和学校続いて麻布尋常中学校で英語の教師だった。後に岡山その他いくつもの学校で教え、日本初のパイプオルガンの導入、秋芳洞の探検や目の不自由な人への点字タイプの普及に努めるなど、多彩な活動を通してヴォーリズ同様日本に尽くし、のちに日本に帰化した人であった。軽井沢には早くから訪れており、軽井沢50周年のパレードでは先頭の人力車に乗っている。夫人の恒さんとの出会いも軽井沢だった。東洋英和初期の宣教師で山梨英和創立者であるコーツ夫人（ミス・ウイントミュート）の建てた寮で出会ったという。恒さんは女子学院出身で、結婚にあたって正式な手続きで外国籍を取得した最初の日本女性であり、また矯風会、婦人運動に生涯を捧げ、国際舞台で活躍したクリスチャンであった。東洋英和の校歌の作曲者である山田耕筰氏は彼女の弟という縁や婦人矯風会の活動でも、ミス・ハミルトンとは交流があったであろう。こうしたことから、閑静な良い場所に立つ別荘をガントレット氏が間に入って娘婿の土井氏に購入を勧めたのは自然な成り行きだったと考えられる。その後そのお嬢さんに相続されたが、家族が成長すると利用する機会は少なかったということである。

<現所有者とこのコテージとの出会い>

現所有者のYご夫妻は、隣の⑥にあたる土地に、周囲の景観に見事に溶け込んだ素敵な別荘を3年前に建てた方である。

土地購入の時から、廃屋のようでも②の建物に強く惹かれるものを感じたが、その時点では

売りに出ていず、このあたりの場所が気に入って隣の土地を購入なさった。そしてノルマン師ゆかりの地ということから軽井沢の歴史を勉強し歴史のある別荘を見学するうちにヴォーリズ建築に魅了され、設計をヴォーリズ建築事務所に依頼した。あれこれ設計を練っていた途中で②の土地が売りに出され、Y氏は理解のない人を買われて壊されてしまうのを恐れてこちらも建物ごと手に入れた。ご自分の別荘の建築のかたわら②の前所有者に会って祖父のガントレット氏の話聞き境界石の名前を調べているうちに、昨年ヴォーリズ氏による設計図が発見され、さらに設計図のあて名の「HAMILTON」が東洋英和の元校長であると判明したのだった。

Y夫人は不思議な縁が次から次へとつながって隠されていた物語に光が当てられていったことに感動を覚え、このコテージは「精霊が集まる家」と感じられるそうだ。

<避暑地軽井沢125年と英和ゆかりの宣教師達～戦前>

明治初期にはさびれた宿場町であった軽井沢が今のようなリゾート地に開発されてきたきっかけは、1886年にカナダ人英国聖公会宣教師のショー師とイギリス人でお雇い外国人のディクソン氏が家族とひと夏を過ごしたことに始まるという。

軽井沢の歴史の流れの中に英和ゆかりの宣教師達の活動についてみてみよう。第2代校長の



ラーゼ夫妻

ミス・スペンサーは1887年に東洋英和学校のトーマス・A.ラージ氏と結婚し、ラージ夫妻の新婚旅行先は軽井沢であった。外国人による滞在のごく初期にあたる。その時彼女は馬で草津に行ったり、浅間山に登ったりしたことが本国への報告に書かれている。彼らに象徴されるように、軽井沢は数多くの宣教師と明治政府お雇いの外国人教師、外交官とその家族が夏を過ごす避暑地として知られるようになった。

その後別荘を持つようになった欧米人達は地元の人々にパンの焼き方を教え、自分達の社交生活が送れるように避暑団を結成し環境を整えていった。1910年頃には旧軽井沢の通りにはおしゃれな店が軒を並べていたが、聖日の日曜日は休業し旧来の観光地につきものの歓楽街はつくられなかった。彼等は昼はテニスやゴルフに山登り、夜は自分達で演じる音楽会や演劇会で楽しみ、日曜日には教会に集ったという。この頃には日本人の上流階級の人々も欧米人のコミュニティに加わるようになってきていた。多くが音楽の才能豊かだったカナダの婦人宣教師達は勿論そのコミュニティの重要なメンバーであったであろう。

ミス・ロバートソンと同時代で、四期校長を務めたミス・ブラックモアは、現在の万平ホテルにほど近い桜の沢にブルックサイド・コテージを持ち、夏休みには家に帰れない寄宿生を預かって過ごした。爽やかな高原の長期の共同生活で欧風文化を満喫した卒業生の手記が『東洋英和女学校五十年史』に掲載されている。

全国各地に散らばっていた宣教師の方達は、なぜ夏になると軽井沢に集まってきたのだろうか。それはただ蒸し暑い都会を避けるためだけではなかった。軽井沢はいったん仕事から離れて自然の中で自分を取り戻し(=リトリート)、年に一度の集会を持って情報交換や研修をする地でもあった。保育関係でも、1906年に結成されたJ K U (日本幼稚園連盟)は在日外国人保

育者が日本のキリスト教保育を推進しようと結成した機関だが、年1回軽井沢で年会を開くのが基本の活動であった。のちに東洋英和短期大学保育科となっていく上田保姆傳習所初代所長のミス・デウォルフや当時は静岡英和にいらしたミス・ヴィーゼーは結成時の会員である。

おそらく1910年代前半に軽井沢で撮影されたと思われる宣教師の方々の写真(p.5参照)には、リラックスした彼女達の笑顔が並んでいる。

<終わりに>

ひところまで軽井沢はちょっと上品でハイカラなイメージであったが、そのイメージは、私達の学校で生徒を慈しみ厳しく教育なさった宣教師の先生方の醸し出されていた雰囲気と重なるものだ。それは、実は彼女達が軽井沢でもコミュニティの担い手であったという事実を知れば知るほど、腑に落ちることであった。軽井沢の発展上、その性格づけには宣教師達の信条や暮らしぶりが大きな影響を及ぼしたのである。

私は今年の夏、ミス・ブラックモアのブルックサイド・コテージの跡地と、ミス・ハミルトンのコテージの両方を見学する機会を得た。一方は跡地の後に建った別荘が更地にされようという状況なのに対し、もう一方は幸運にも所有者の理解に助けられて維持管理されている。

文化遺産とは、先人達の足跡を大事に思ってその営みを追体験したいと願う熱心な思いによって継承されるものであろう。東洋英和ゆかりの宣教師の先生方が夏を過ごされた場所であり、かつての日々を語りかけてくれるコテージに立つことを許されたことに心から感謝したい。

(史料室 酒井 ふみよ)

なお、現地は個人宅のため一般非公開です。

最終ページ(p.12)に、設計図のうち1枚を掲載しています。



コーテス



メガフィン



パイダー

提供：東京女子大学



左：コンスタンス・チャペル
右：アレン

ミス・ハミルトンコテージの土地における所有者と逗留者（1920～1937）

	読み	氏名	生没年	日本滞在 または 奉職期間	国籍	東洋英和在職期間 または主に勤かれた機関や役職、赴任地	所有または 記録に残る 逗留した年
所 有	ロバートソン	M.A.Robertson	1861-1950	1891-1928	カナダ	静岡英和3代校長、○山梨英和4代・6代・8代校長、東洋英和(1922-1928ほか)	1920より所有
	ヴィーゼー	M.A.Veasey	1863-1949	1892-1929	カナダ	東洋英和(1898-1904ほか)8代校長、○静岡英和7代・9代校長、浜松	ロバートソンと共有
	ハミルトン	F.G.Hamilton	1888-1975	1917-1942 1947-1956	カナダ	○東洋英和(1918-1942、1950-1956) 15代・17代校長、短大保育科主任、山梨英和	1932より共有
	ハード	H.R.Hurd	1886-1984	1911-1941	カナダ	東洋英和(1924-1930ほか)、山梨英和、○上田、富山	1932より共有
返 留	コーテス	S.R.Courtice	1884-1980	1910-1943 1946-1949	カナダ	○東洋英和(1911-1943、1946-1949)、静岡英和、在日WMS総主事	1922
	スコット	M.C.Scott	1883-1980	1911-1941 1949?-1964?	カナダ	東洋英和(1925-1926、1949-1964?ほか)、長野、富山など	1922
	アレン	A.W.Allen	1878-1973	1905-1940	カナダ	東洋英和(1911-1914など)、山梨英和、○愛清館	1923・1924
	ジョスト	H.J.Jost	1869-1960	1898-1938	カナダ	東洋英和(1898-1899)、川上幼稚園(金沢)、○青山学院	1923・1927
	ピショップ	A.B.Bishop	1896- ?	1922-1926	カナダ	東洋英和(1922-1923)、○山梨英和	1923
	メガフィン	B.I.Megaffin	? ?	? -1927	カナダ	東洋英和(1922-1927)	1923
	バー	L.Barr	1890-1979	1920-1937	カナダ	東洋英和(1920-1921、1934-1937ほか)、山梨英和	1924
	マククリーン	A.O.Mclean	? ?	1924-1925	カナダ	東洋英和(1924-1925)	1924
	パイダー	M.Pider	1880-1967	1911-1941、 1947-1950	アメリカ	青山女学院、○東京女子大学	1924 のち一時⑤を所有
	ワグナー	D.Wagner	1888-1980	1913-1941、 1946-1953	アメリカ	青山女学院、造愛女学校(函館)、○東京女子大学	1924
コンスタンス・チャペル	C.S.Chappell	1891-1989	1912-1940 1947-1961	カナダ	東洋英和(1912-1917)、山梨英和、○東京女子大学	1927	

隣を所有	マシューズ	W.K.Mathews	1871-1959	1902-1941	アメリカ	関西学院	1920～1939⑥
	ヘニガー	E.C.Hennigar	1880-1954	1905-1940	カナダ	栄冠幼稚園(福井)、東洋英和(1935-1940)	1920～1929⑦
	ヘニガー夫人	M.Hennigar (旧姓 Hart)	1882-1963	1905-1940	カナダ	栄冠幼稚園(福井)、富山、松本、東洋英和(1935-1940)	
隣に逗留	I.シャノン	I.L.Shannon	1873-1957	1904-1940	アメリカ	○広島女学校、ランパス女学校(西宮)	1937(⑧)
	K.シャノン	K.M.Shannon	1881-1944	1908-1940	アメリカ	○広島女学校、バルモア女子英学院(神戸)	1937(⑧)
	シャーロット E.ハート	C.E.Hart	1867-1932	1889-1925	カナダ	東洋英和(1905-1906ほか)、上田、○長野旭幼稚園	1922、1923(⑨)

軽井沢ナショナルトラストの会長である中島松樹氏および事務局の木下裕章氏提供の資料により、1923年から1937年にかけて、数年間の夏の逗留者が判明できた。土地②③④を合わせると、解明できただけでも宣教師は21名に上る。そのうちカナダ人は15名である。
なお、表中の○印は、奉職機関名が複数ある場合に、在職期間の長いものを示す



婦人宣教師達（1910年代前半 後ろは軽井沢離れ山）

左から
前列：不明、ケギー、不明
中列：C.E.ハート、ロバートソン、不明、
ハーグリーブ、ヴィーゼー、克蘭ビー、
ブラックモア
後列：キラム、アレン、ハウィ、ジョスト、
不明、ピンセント、ティンバーレーク
(太字は表中・文中にある人物)

〈資料紹介〉 20

軽井沢で書かれた

ミス・ハミルトンからミス・カートメル宛の書簡

今年寄贈を受けたミス・カートメルの遺品の中より、ミス・ハミルトンが軽井沢のコテージでお書きになり、投函された手紙が発見された。その全文を紹介したい。



書 簡

便箋左上に署名、右にKaruzawa、
Aug.16 '33と読める
封筒宛名書き左下の「カナダ行」も
ミス・ハミルトン自筆

Aug.16 '33

My dear Miss Cartmell:

I did write you last fall thanking you for the long article about your days in Japan which I'm sure you penned with great effort as you say your eyesight is so poor. I have typed it and am returning the manuscript for I am sure your niece will want to preserve this history in your own handwriting. It is wonderful to have this directly from the founder of our school to use during our anniversary celebrations. We are just getting started on compiling the History. There'll be very little of it in English I expect, but you will be interested in the pictures, and you shall surely have a copy.

I wonder if you have heard that our Dr. Hiraiwa was called to his Heavenly Home this summer. We went down from here to his funeral July 31st. It was a great blow to us all as you can well imagine for we were counting everything on his help in the preparing of our 50 years history and carrying through our celebration. He has been so active the possibility of him being suddenly taken away from us never crossed our minds until about the first of June. He taught his two classes in our school and conducted a meeting of the Board of Directors May 31st. After that we closed school for a couple of weeks for moving into the new building so didn't expect to see him again till June 14th. On the 12th I had a card from him saying he would be at a committee specially wanted to have on the 14th but when the day came a phone message told us of his illness. The next day he underwent a very serious operation which we learned afterward was for cancer of the stomach. He was in the hospital three weeks & in his own home nearly three weeks. I saw him once and felt sure he could not live through the heat of August, so was not surprised when news came of his death on July 26th. We are selfishly very sorry, but glad that he did not have to endure a long tedious illness.

We were in the new school a month before summer and it was a great joy. The interior decorating is being done during vacation and on Nov. 6th we plan to have our Formal Opening. Hoping you are in your usual good health and with kindest regard to Mrs. Pescott. I remain Yours Most Cordially.

F.G.Hamilton

P.S. I am keeping the old photos a little longer. Hope it is all right. Viscountess Saito entertained some of us school people recently and showed us with great pride the Bible you had sent her and your photo. You have a wonderful place in the heads of your old friends here.

F.G.H.

(原文のまま掲載)

(訳文)

1933年 8月16日

敬愛するミス・カートメル

昨秋、あなたの日本で過ごされた日々についての長い文章に感謝申し上げる手紙を書きました。あなたは目のご不自由でいらっしゃいますから、その文章を書くには大変なご努力をされたことでしょう。それをタイプ打ちしましたので、元の原稿をお返しいたします。きっと姪御さんはこの記録があなたの直筆なので大事に残しておきたいと思われることでしょうから。この学校の歴史の話を、直接学校の創立者からいただけて創立記念式に使えるとは、すばらしいことです。年史の編纂には取り掛かったばかりです。その年史には英語がほとんど使われないでしょうが、きっと掲載の写真に興味を持たれるでしょう。一部をお手元に必ずお届けいたします。

平岩博士がこの夏、米国に召されたことをお聞き及びでしょうか？ 7月31日に私達は博士のご葬儀に参列いたしました。ご想像の通り、彼の死は、50周年の歴史をまとめる準備をし、お祝いを実行する上ですべて彼の助けをあてにしていた私達にとって大きな痛手でした。とても活動的な方でしたので、突然私達の前から取り去られてしまうことなど、6月初めまで思いもよりませんでした。彼は私達の学校で2クラス教え、5月31日の商議員会の議長を務めておられました。その後、新校舎への移動のために2週間ほど学校が休みでしたので、6月14日まではお会いする予定はありませんでした。12日には、ご本人から、14日の会合にはとりわけ出席したいとのカードを受け取っていましたのに、当日になってご病気のため来られないとの電話の伝言を受けました。翌日、彼は大手術を受け、後から知ったところでは、それは胃ガンの手術だったそうです。3週間入院し、その後家に帰って3週間近く過ごされました。私は一度お見舞いに伺って、8月の暑さの中を生き抜くのは無理に違いないと感じましたので、7月26日に訃報が届いたときはさして驚きませんでした。私達自身としてはとても悲しかったのですが、彼が長くつらい病を耐え忍ばなくて良くなったことは慰めでした。

私達は新しい校舎に夏の一月前に入りましたが、それはそれは嬉しゅうございました。内装は夏休み中に行われており、11月6日には正式

なオープニングを計画しております。

どうぞお変わりなくお元気でお過ごしください。ペスコット夫人によりしくおつたえください。

敬愛の念をこめて

F.G.ハミルトン

追伸：

旧い写真はいましばらく

私が保管しております。よろしいでしょうか。

齋藤子爵夫人は先ごろ私ども学校の何名かをおもてなしくださり、あなたが彼女にお送りになった聖書とあなたのお写真を大層誇らしげに見せてくださいました。日本のあなたの友人たちはいつもあなたのことを特別な思いで覚えております。

F.G.H.



ミス・ハミルトン

(解説)

この書簡は創立50周年の祝典を翌年にひかえ、創立者ミス・カートメルにあててミス・ハミルトンが軽井沢のコテージで書き、投函されたものである。時は1933年8月、ミス・ハミルトンは17代校長職にあった。

この頃ミス・カートメルは87歳でいらしたが、なお求めに応じて創立当初の様子や思い出を書き送ってくださって、英和の教育に関心が高かったことが冒頭からよくわかる。

内容は平岩^{よしかわ}植保牧師の訃報にまつわる報告が多くを占める。平岩牧師は日本メソジスト教会最初の教職の一人であり、関西学院院長、日本メソジスト教会監督の要職につかれた。のち阿佐ヶ谷教会を創立された。東洋英和では1887年より逝去のときまで47年間第2代校主でいらした大恩人である。この方を天国に送ったことは英和関係者にとって深い喪失感を伴うできごとであった。

年史(『五十年史』)や新校舎への期待の簡潔な報告の後、追伸には齋藤春子さんがミス・カートメルから贈られた聖書を自慢したとのほほえましいエピソードが書かれており、そのくだりには、ミス・ハミルトンのウィットが感じられる。

おそらく歴代の宣教師の校長達はこのように創立者と通信を交わしていたのであろう。

(史料室 酒井 ふみよ)

でもそこには青春もあったのです

ドーヴァー 留美

67年という長い年月を遡ると、私達はまだ15、6才という年頃でした。夏もはじめの頃、担任の鶴沼さき先生から貴女方4年の3クラスは政府の指令で蒲田の安藤電気という工場で働くことになりました、と言われました。当時の15、6才と言えば、現在の同年令のお嬢さん方とは違って、言われた事はすんなりと受け入れる程に素直でした。お国の為という概念はさほど無かったと思います。一年上の方達が沖電気の為に学校工場で働くと言われてもそう言うものか、と思っただけでした。

指定された日に蒲田の安藤電気に行きました。駅前的大通りは商店や事務所等ゴタゴタと続く道で、それを海側にしばらく行くとさほど遠くなく工場の門が開いていました。隣に小さい土地があって何か緑色の木や草があり、ほっとした感じがしたのを覚えています。(ここに先行き防空壕が掘られることとなります。)工場の建物はU字形に建っており、門から入るとそこは建物に囲まれた中庭というような物でした。そこで特別な事が出来るという物ではなく、この小さな町工場の朝の仕事始めなどに使われたのでしょうか。

工場の仕事は通信機を組み立てていたように思います。この小さな会社で一貫した製品の製造工程など見た覚えは更にありません。生徒の或る者は事務に廻され、その他の殆どは工場で単純な仕事にかかりました。夏から翌年の春迄そこで何をしたのか、はっきりと思い出せません。マイカ(雲母)を決った大きさに切りそれを積み重ねる仕事。工場側にしても15、6の未経験の女の子達に何かさせるといったらこんなことに決ったのでしょうか。それと青写真を焼くこともあり、目を傷めるからと大きな眼鏡をかけさせられて強烈なあかりで今というダイアグラムを焼きました。別に危険ということはなくとも一寸したスリルを伴うもので、短期間でしたがつまらないマイカ切りよりか数等エンジョイしたのを覚えています。

材料に欠するようになり、仕事に追われるなどという事はありませんでした。家で煎った大

豆をもってきてマイカ切りをしながらお喋りと大豆を喰べるのにあけた日々、と言ったら一番該当しているように思います。

或る秋の日の午後、はじめての空襲警報が鳴り、一機のB29が頭上を通過していきました。高射砲弾がB29の廻りで炸裂しても何一つ当たらず、ゆうゆうと消えていきました。爆弾は一つも落さず写真でも撮っていったのですが、初の事でもあり、おおいに興奮したのを覚えています。何故かこの日の経験と“青い空に銀の翼、飛行機早いなアと言う子供の頃の国語の教科書の中の数行がぴったりと一致して、恐怖の記憶は今でもありません。

戦局は時々刻々と悪化して行き、子供の私達でさえいずれかは……と思うようになりました。英和という学校は沢山の外国人の宣教師がおいでで、Western style^{ウェスタン スタイル}の行事が色々あり、普通の学校とは違って私達は西欧のCul^{カル}ture^{チャー}を少なからず身に付けていました。新聞などに漫画入りでルーズヴェルトの頭に角が生えていたが、そういった風潮に簡単に浸るような事は出来ませんでした。私個人にしてもこの傾向を身に付けるようになったことはひとえに英和のおかげであると思います。子供の頃に英語を教えていただいたミス・ハミルトンと角を生やしたルーズヴェルトを一つのカテゴリーに入れるような事は15才であった私にも正当な事とは思いませんでした。世の中の複雑な成り立ちを私達に教えたのは実にもって此の時代であったと思います。

冬になり一度大雪が降って、夕方から降り出した雪の中を蒲田から各自の家に帰るのは容易な事ではありませんでした。電車が停ったり動いたりして私達の帰宅は大幅に遅れ親達を心配させました。翌日は勿論工場行きは不可能となり、おおいに喜んだのを憶えています。秋以来関東地方には大きな空襲はありませんでしたが工場が作ってくれた浅い防空壕に入る練習をしたのを覚えています。

3月の10日、5月の23・25日と東京はこの3回の空襲で殆ど全滅状態になりました。我が安

藤電気も4月に焼け、その後英和の生徒はこの焼け跡に立つ事はありませんでした。鶴沼先生が御自宅の鎌倉から線路伝いに蒲田の安藤電気を見に行かれ、その時の状態を後で話して下さいました。

「丁度男の人達が防空壕から子供達の死体を引きずりだしているところで、ボンボンにふくれた死体を放るとそれが地面に落ちてはずむんです。この時程私は空襲が昼間でなくてよかったと思わないではいられませんでした」

この三月の空襲以来クラスメートも随分と家を失い皆チリチリになりました。が、幸せな事に命を落された方はあまりありませんでした。小学科の半ばで私達の担任になられた中沢千代子先生が深川の御自宅付近で行方知れずになられた事は今思っても胸が痛みます。

可能な人は英和に行くようにと言われ、幸せに私の家はまだ焼けていなかったの、今も通じていた目黒からの市電に乗って一の橋迄行き、鳥居坂を上って英和の前に立ちました。鳥居坂の辺りから三河台にかけては大して変わっておらず、山尾さんも反対側の実吉さんのお家もちゃんと在りました。何と言う蒲田との違いでしょう。昔の幸せだった日々の事が胸によみがえり、こうやってここに立って変わっていない校舎を眺めている自分をつくづく幸せと感じたものでした。4月15日以来英和と安藤電気との関係は消失しました。

こうやって書いていると、安藤電気時代は不安と倦怠感以外の何物でもなかったように思います。でも時にはそれを忘れた事もあった、と友人達と話し合います。誰方だったか忘れましたが多分アメリカ帰りの方でしょう。工場にこっそりと何冊かのアメリカの婦人雑誌を持って来られました。美しいリアルなグラビア版の喰べ物の写真を見て、私達は時も所も忘れて夢中になりました。単純なフルーツの写真一つにでも私達の世代はここしばらく遠ざかっていたのです。持ってみえたお友達も大胆不敵でしたが、昼休みに写真を見て興奮している私達を見ても、誰もとがめ立てはしませんでした。

それと外国本の廻し読みが始まりました。こっそりとバッグの中に入れて、電車の中でなど絶対に読まないことを念を押し合いました。これ等の小説は全部が欧米物で日本語訳でしたから、戦争以前に出版されたものです。敵国の本を読んではいけない、これは日本政府の方針

でした。外国本の魅力というものに目が開きかけた年頃の娘達の渴望を上からの圧迫でストップすることは出来ませんでした。軍一色に染まってナギナタを振り廻していた当時の若い人達（特に女性）のことを考えると、私達はノーマルであったのではないのでしょうか、と少々誇らしく思います。

大分以前に亡くなられた鶴沼先生に、今更に心からの感謝を受けていただきたいと、私達は心から希うものであります。

付記

これは大事なことと思いますので、付け加えさせていただきます。私達4年3クラスがあの東京大空襲の只中に卒業したのは政府の指定によるもので、戦争とかまましてや家庭の事情によるものでは決してありませんでした。一年上の学生達は通常の5年間の課程を終え、私達4年生は彼女等と一緒に卒業したのです。もっとも卒業式が何日、どうやって行われたのか私には思い出せませんが。

一年下の学生達は新しい文部省の指定によって6年間の課程を進むことになりました。

(1945年高等女学科卒 旧姓 田村)

鶴沼さき先生の句集『手函』より

日の丸の鉢巻をしてモンペはき工場に日々を過したり少女等

こんなことで勝てるものかと思ひつつ電波探知機のハンダづけし

名ばかりの壕に退避し少女らは讚美歌を唱ふ明るき声にて

今日も無事に夕陽の中を帰りゆく少女を見送る感謝のひと時

六郷を渡りてあつと立ちすくむ一望何もなし空と焼野と

少女らに幸なりし夜の空襲と人なき焼野にひそかに思ふ

〈思い出の先生がた〉22

朝倉先生と私 ―秘書、いえ教え子です―

山田 のりこ

朝倉先生とは成蹊大学時代から合計15年間、成蹊大学時代は研究所の一職員として、東洋英和女学院では秘書として開学時から10年間お仕えしました。先生は開学時の学長という重責を担われ日々激務であったにも拘わらず、ゼミを持たれました。また挨拶のある学校にしたいと学生に自ら挨拶をされ、学生の成長を楽しみに、学生のために粉骨碎身された10年間でした。学食での昼食後、そのまま学生を連れてきて学長室でお茶のサービス付きでお話を続けられることも度々でした。既設の女子大と肩を並べてさらには追い抜きたいという意気込みから、次々と新しい施策を立てて実行に移されるため、私の仕事は成蹊大学時代以上に忙しく、特に大学院開設時は大学を出るのが夜10時という日が続きました。「朝倉先生は傷や欠けた所のない綺麗な水晶のような私心のないお心の方だから、嫌な所はひとつもない。どのようにこき使われても先生のことは絶対に嫌いになれないから、困ったものだ」と学長室メンバーで冗談を言い合ったこともありました。

先生がゼミ生の就職指導を手取り足取りで何もかもされることに対して、ゼミ生たちは先生の学長というお立場を考えるべきで、少し甘やかしすぎではないかと私が苦言を呈したことがありました。しかし先生は「学生が自分や自分の就職のことしか考えないのは当たり前だろう。彼女たちの可能性を信じてやらなければ」と逆に諭されてしまいました。ご退任の年まで、採用試験に落ちたゼミ生を慰め、励まし、紹介状や推薦状を書かれ、ゼミを欠席したゼミ生には体調を気遣う電話を掛け続けられました。

学長秘書になりたての頃、先生の蔵書を整理中に大学生の時に亡くなられたご子息の思い出の記を見つけて、改めて先生にお悔やみを申し上げたことがありました。その時の先生のお言葉は意外にも「子供を亡くした親はこの世に何万といるよ」という、人生の試練の時に自分自身を憐れみ、悲しみに暮れてはならないと神を信じる者としての強い意志を感じさせるもので

した。私は2005年7月から病気になり、9ヶ月間の療養期間中、毎日病床で「朝倉先生なら今の私に何とおっしゃるだろうか。」と自問し悩みました。ある日、突然その時のことを思い出し、私も先生のように、今の難局を何事もなかったかの

ように軽々ととび越えなければならない、先生はそうおっしゃるに違いないと確信でき、前向きに治療に取り組み、翌年4月に仕事に復帰することができました。

朝倉先生のご葬儀で本郷教会の神父様が、朝倉先生は戦うべき戦いを全力で戦い、神のもとに召されたと称えられました。「人は神のために生きるのだよ」といつもゼミ生におっしゃっていた先生とこの世でのお別れをしました。

お別れから5年以上経った今も、何についても「先生なら何とおっしゃるだろう。」と先ず考えます。朝倉先生は、こうして私を含めた多くの人の心の中に生きて、今も導いて下さいます。私は秘書というよりも教え子の一人でした。(法人事務局 人事課長)

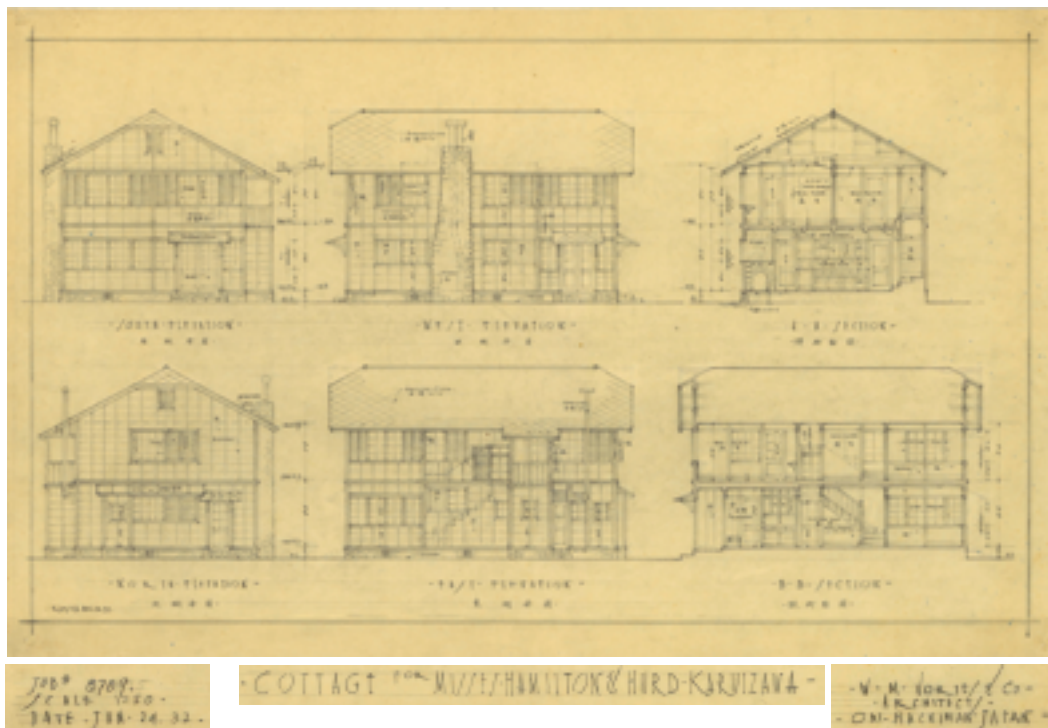


朝倉孝吉先生

朝倉孝吉（あさくらこうきち）先生

―略歴―

- 1921年 9月24日静岡県に生まれる
- 1943年 旧制成蹊高等学校卒業
- 1946年 東京帝国大学農学部卒業
(のち農学博士)
- 1946年 日本銀行調査局入行 (～1967年)
- 1967年 成蹊大学政治経済学部教授就任
- 1980年 成蹊大学学長就任 (～1986年)
- 1989年 東洋英和女学院大学学長就任
(～1999年)
- 2006年 6月18日逝去 (享年84歳)



- * 「自由学園90年の歩み」
- * 『青山学院大学五十年史』
- * 「70回を迎えた野尻学荘 - 長期キャンプの意味」 森井利夫著 東京YMCA
- その他 他大学年史紀要 等多数

主な移管資料

- * 集団疎開絵日記（コピー） 小学部母の会より
- * 「ハミルトン先生を送る歌」 楽譜／東光会館
図面／幼稚園設計図 3枚 東光会より

購入資料

- * 『引き裂かれた忠誠心 - 第二次世界大戦中のカナダ人と日本人-』 飯野正子等著 ミネルヴァ書房
- * Patessio, Mara, *Women and Public Life in Early Meiji Japan*, The University of Michigan
- * “Cottage for Misses Hamilton & Hurd - Karuizawa” 設計図画像（3点）

〈訂正とお詫び〉

No.76 P.6

（誤）5月24日 →（正）25日

訂正し、お詫び申し上げます。

〈お知らせ〉

- ・史料室では、学院の歴史や学生生活をものがたる資料、写真、記念品等を収集しています。ご家庭にあってご不要のもの（特に戦前のもの）がありましたら、ご寄贈いただけると幸いです。
- ・「史料室だより」在庫の古いバックナンバー（No.8～No.62）を整理いたします。ご希望の方があればお頒けします。（送料はご負担願います）

お問い合わせ先は下記のとおりです。

東洋英和女学院史料室（法人事務局内）

Tel 03-3583-3166(直) Fax 03-3583-3329(直)

E-mail : archive@toyoeiwa.ac.jp